

2019年度 入学試験問題
(仙台・東京・東海・高松会場)

国 語

(60分)

〔注意〕

-
- ① 問題は㉑～㉓まであります。
 - ② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
 - ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入のこと。
 - ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入のこと。
 - ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。
-

西大和学園高等学校

国語 訂正

問六 選択肢

誤 イ 『余分な脂肪と懷疑を抜き取り』

←

正 『余分な脂肪と懷疑を抜きとり』

誤 オ 『少しはあります』

←

正 少しは『あります』

注釈

誤 (注7) 衆罪

(注8) 警

(注9) 仏法興隆の所

←

正 (注7) 仏法興隆の所

(注8) 衆罪

(注9) 警

∴ 多くの罪。

∴ まげ。

∴ 仏教が盛んである場所。ここでは奈良のこと。

∴ 仏教が盛んである場所。ここでは奈良のこと。

∴ 多くの罪。

∴ まげ。

問題は次のページから始まります。

—
次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

思ったことをうまく口に出せないという「感じ」が、本書の始まりだった。その異和感から出発して「書く」ことは論理的思考を呼び寄せ、その思考こそが「書く」にふさわしい言葉、普遍性のある言葉を探り当てる。その先で私たちが出あうのは、自分の世界がひとまわり広くて多様なものになっていく感じだ。その「感じ」のことを、私たちは「自由」という言葉で呼ぶ。異和感から出発して「書く」ことの先で私たちが出あうのは、この「自由」なのである。

本書全体を通して述べてきたように、論理的であることによって私たちは現実への異和感を表明し、別の社会のあり方を着想したり、より自由に生きる手がかりを得たりすることができる。① 社会の現実と出あい直すこの過程の全体が、「書く」という作業だ。だが、「書く」過程での論理的思考は、現実への単なる拒絶や立場の異なる者への攻撃、糾弾を意味していない。「論理」という言葉の硬く冷たいイメージとはウラハラに、論理的思考がやわらかな言葉を吐き出すことが、むしろ重要なのだ。そして、ときに論理的思考は美しい言葉を詠うことさえある。本書の締めくくりに近づいたいま、そのように詠われた言葉を読者と共有したい。

紹介するのは、詩人・吉野弘（ひろし）による「香水／グッド・ラック」と題された一篇（ぺん）の詩である。約半世紀前に詠まれたこの詩は、当時の日本のテレビ画面に映し出された一人のアメリカ兵を題材にしている。インタビュに答えるこのアメリカ兵は、当時ベトナムでくり広げられていた終わりの見えないドロスマ（ドロスマ）と化した戦争の戦地へ帰ろうとしている。② その兵士を凝視して書かれた言葉は、どのような異和感を起点にして生まれているだろうか。筆者が言葉を吐き出す論理的思考を共有するとき、読み手である私たちの中にはどのような思いが生まれるだろうか。

香水 —— グッド・ラック

五日間のキユウカ（キユウカ）を終え／日本のテレビの画面から／ベトナムに帰るといふ／兵士に

グッド・ラック／司会者は／そう、餓（うた）けした

年は二十歳／恋人はまだいません／けわしい眉に微笑が走る／米国軍人・クラーク一等兵

司会者が聞いた／戦場に帰りたくないという気持が／少しはありますか

君が答えた／ありますが、コントロールしています

戦う心の拠りどころは／何ですか

——やはり、祖国の自由を守る／ということではないでしょうか

小柄で、眼が鋭い

細い線を曳いて迎えにくる一条の死／ギビーンに、避けよ、と／戦場は／君のわずかな贅肉をさらに殺ぎ／余分な脂肪と懐疑を抜きとり／筋肉を細く強く、しなやかにした

これだ／戦場の鍛えかたは

その戦場に帰ろうとする君の背に／グッド・ラック

祝福を与えようとして手に取り／——落として砕いてしまった／小さな高貴な香水瓶／の叫びのようだった言葉

グッド・ラック

なんて、ひどい生の破片、死の匂い

たちこめる強烈な匂いの中に／溶け入るよう／蒼白な画面に／君は／消えた

(吉野弘『吉野弘詩集』「感傷旅行」〔青土社〕より)

優れた詩を分析的に解説することは、決していい読み方とはいえない。説明などなくても「わかった」という感覚がやってくれば、それで十分なだから。③詩の言葉は論理の言葉とは違う。だが、そこには論理的な思考がないということではない。詩人が発する言葉は、しばしば世界への究極的な異和感の表明ともなる。言葉が最も沈黙に近づく奥底から表出された異和感といってもいい。そして異和感を突き詰めたところには、必ず論理がある。

そこで私たちは、この詩の背後にある「論理性」を、詩の良さをだいなしにしない程度の説明に留めて締めくくりに向かうことしよう。

詩の最初の部分では、司会者と兵士の間で普通と思えるやりとりが交わされる。型どおりと思える兵士の答えも、おそらく本心からのものであったろう。だが、その若い兵士の様子をテレビの画面で見ていた詩人は、彼が戦場に赴くや、たちまち機械のような殺人マシンと化してしまう光景を想像する。目の前のテレビに映る普通の若者と、戦場における殺人マシン——そこに強烈な現実の裂け目が露出する。詩人がその裂け目にそそぐまなざしの底にあるものこそ、異和感にほかならない。

しかし、⑤詩人が覚えた真の異和感はもうひとつ先にある。司会者は帰りゆく兵士に「グッド・ラック」という「饞け」の言葉を投げかけた。詩人は、その言葉が実に残酷な響きを持つかを感じ取る。戦場という死地に向かつてゆく兵士に「幸運を！」というのは、不治の病人に「元気でね」「がんばってね」というのに等しい。⑥「」のように、人を励ますはずの言葉が、当事者にはかぎりなく残酷な言葉になってしまっている。しかもそれを発した司会者は、気づいていない。テレビも半ばあたりまえの光景であるかのように映し出し、人々はそれを眺めている。詩人はその現実を前にして「なんて、ひどい生の破片、死の匂い」という言葉を紡ぎ出すのである。そこには、より根源的な筆者の異和感がある。この異和感の表出により、詩人は最後には若い兵士の側に寄り添っている。「たちこめる強烈な匂いの中に／溶け入るよう／蒼白な画面に／君は／消えた」という詩句の余韻は、そのイメージとともに私たちの心に響き、深く浸透してくるのである。

現代を生きる私たちの目の前には、落として砕いてしまった ※ の破片が、いまこのときも無数に散らばってはいないだろうか。

現実をリアルに見ることを抜きに、その本質を抜き出すことはできない。自分で「書く」ということをくぐらなければ、思いの核にあたるものを引き出して把握することもできない。「書く」ことを通じて論理的思考が生まれ、論理的思考が普遍性のある言葉を探り当てる。それによってはじめて私たちは現実に飲まれることを拒み、自分の異和感を他の人に届けることが可能になる。だから詩人は、そして私たちは「書く」のだ。

私はそれを「自分の言葉を持つてリアルに生きる」^⑥と言っている。

(大堀精一『小論文 書き方と考え方』による)

(注1) 異和感

… 一般にいう「違和感」のこと。自分の内部で感じ取った生理的・身体的な異状の感覚を、医療用語でこのように書くことがある。学習漢字としては「違和」が望ましいが、本設問では以降の設問も「異和感」に統一して扱う。

問一 波線部 a ~ e のカタカナを漢字に直せ。楷書で丁寧に書くこと。

問二 文中の空欄部 ※ に共通して入る語句を、引用されている詩のなかから九文字で抜き出して答えよ。

問三 傍線部①「社会の現実と出あい直すこの過程の全体が、『書く』という作業だ」とあるが、筆者は「書く」ことによって現実がどのようなと述べているか、本文中の詩が引用される前の部分から二十字以上二十五字以内で抜き出して答えよ。

問四 傍線部②「その兵士を凝視して書かれた言葉」とあるが、吉野弘の詩の言葉のどのような点に注目して、筆者は詩を紹介しようとしているか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア・青年の様子を通じて、多様で自由であるはずの世界を戦争がゆがめていることへの異和感を訴えているところ。
- イ・テレビにさらされる青年の中にある割り切れない思いに共感して、優しい言葉をさりげなく投げかけるところ。
- ウ・テレビによる青年兵士への扱いに対する異和感をきっかけに、青年の側から細やかに現実をとらえ直すところ。
- エ・テレビを見る大衆の感覚に対して飲まれることなく、青年に対して感じた異和感をきっぱりと表明するところ。
- オ・当然のようにテレビが兵士を映し出し、人々が戦争を傍観することへの異和感を美しい言葉で訴えているところ。

問五 傍線部③「詩の言葉は論理の言葉とは違う」とあるが、ここでいう「詩の言葉」とはどういうものか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア・論理的な思考を通して、思いが目の前の現実に影響されずに読み手の感覚に届くように選ばれた言葉のこと。
- イ・世界を受け入れられない感覚が極まってもなお異和感なく納得することができる冷静で論理的な言葉のこと。
- ウ・論理的とはおおよそ言えないながらも、相手に分かったと感じさせることができる情緒にあふれた言葉のこと。
- エ・現実の裂け目に対して感じた異和をありのままに他者に届けるための、理屈を超越した感覚的な言葉のこと。

オ・思いの中核にあるものを取り出す論理的な思考を行う目的にふさわしい、普遍性のある飾らない言葉のこと。

問六 傍線部④「彼が戦場に赴くや、たちまち機械のような殺人マシンと化してしまふ光景を想像する」とあるが、ここで筆者が

指摘している詩の内容について議論した次のそれぞれの意見のなかで、正しくないものを一つ選び、記号で答えよ。

ア・Aさん「『これだ／戦場の鍛えかたは』は、小柄で目が鋭いという兵士の見た目のことについて作者が評価している言葉だと
思うんだけど。迎えにくる死を避けよ、と書いてあるし」

イ・Bさん「『余分な脂肪と懷疑を抜き取り』っていうと、戦場行ったらやせるってことでしょ？ 死を避けるためには体にぜい
肉付ける余裕なんかないし、いろいろ考えたりしているわけにもいかない、っていうことかな」

ウ・C君「それを言ったらはじめの方の『けわしい眉』の段階でも同じことが言えるんじゃないの？ 微笑が『走る』ってのも反
応速すぎだし、そもそもインタビュでそんなに表情硬くていいのかって気もするし」

エ・Dさん「素直でいいといえばそうだけど、『恋人はまだいません』て答えて微笑ほほえんでいる場合かって気がするけどね。戦場行
かされてたら恋人どころじゃないでしょ。それで『祖国の自由を守る』って思っているんだから不思議だよな」

オ・E君「いやでもさ、『戦地に帰りたくないという気持』が『少しはあります』って言ってるんでしょ？ 実際はけっこう無理
しているんじゃないかと思うよ。それを自分で言うように『コントロール』してるんなら逆にすごいよな」

カ・F君「本音ではそう思わない、正しいと考えるはずのないようなことでも、戦場で生き抜くために迷いなく選んできた、って
ところかな。『祖国の自由』のためだって即答しているのもそういうことでしょ」

問七 傍線部⑤「詩人が覚えた真の異和感はもうひとつ先にある」とあるが、詩人が「真の異和感」を感じているのはどのようなこ
とか。五十字以内で説明せよ。

問八 傍線部⑥「自分の言葉を持ってリアルに生きる」とはどういうことか、八十字以内で説明せよ。

問題は次のページに続きます。

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

東京で夫と二人で暮す佳代子は、弟夫婦と地方で暮す母を初めて自宅へ招いた。佳代子の母は教養があり家事をそつなくこなし、そんな母を佳代子は幼い頃から誇らしく思っていた。本文は、母が上京した日、佳代子の家で夫と三人で夕食をとる場面から始まる。

銀座、浅草、日本橋。明日から母を案内する。母が居る間、佳代子は仕事も休みをもらい、車を雇えばいい、という夫の言葉に甘え、少し贅沢な東京観光を計画していた。暮らし向きは楽ではないけれど、ふたりにはまだ子もおらず、共稼ぎでもあったから少々の蓄えはあるのだ。

「職業婦人だなんて」と夫の両親は眉をひそめ、子どもができないことと結びつけてたびたび佳代子を責めたが、母のような女性になりたくてタイピストという仕事を選んだ彼女は、微塵の負い目も感じなかった。

「明日、街へ出たら映画もいいでしょう。確か雷蔵(注1)の新しいのが封切られましたから」

夫の言うのに応えようとした母の口から突然、蛙の鳴くような音が漏れた。佳代子も夫も何事が起こったのかと母の口元を凝視した。それが大きなゲップであることに、すぐには考えが行き着かなかったのだ。夫は場を取りなすように「ビールのせいでしょう。僕もよくやります」と穏やかに笑った。佳代子はなにも言えず、ただ内心の動揺を隠すのに必死だった。こんな行儀の悪いことをする人ではなかった。咀嚼の音さえも厳しく注意する人なのだ。けれど、その音にもっとも驚いていたのは母自身には違いなかった。母は愕然とした様子で口を押さえ、それから黙ってうつつむいた。さつきは気付かなかったが、母の髪は薄く、つむじの辺りは大きく地肌が見えていた。

翌日銀座へ向かう車の中で、母は落ち着かなく身を揺らし「こんな無駄遣いはいけないよ」と拝むような口調で言った。並木通りで車を降り、和光や松坂屋を眺める。中に入ってみましょうと佳代子が誘っても、なにも買わないんだから入ったら申し訳ないよ、と小声で返して沿道から建物を見上げるのだ。

そういうときの母の身体は、妙な具合に曲がっていた。腰が曲がっているというのではなく、そう、ちょうど子供をおぶったときのような、背中の重く傾いだ形によく似ていた。母の背はもうピンと張ってはいない。そこにはもう、なにかが貼り付いてしまっている。長い歳月がもたらす、逃れられないなにかが。

お昼は資生堂パーラーでとった。母はメニューを見て「高いよ。高いねえ」と念仏のように呟いた。

「いいのよ、私も食べたいもの。たまの贅沢なもの」

佳代子がそう言うのと不承不承「じゃあ、佳代ちゃんと同じものをいただこうかね」と顔に不安を浮かべたまま言った。節々が鉤状に曲がった指でコップをつかんで、一口水を含み、「帰りは歩きで行こうね」と微笑んだ。

「無理よ。ここから千駄木まで歩くのは」

「平気だよ。お母さん、足は丈夫だよ」

母はテーブルの下からひよいと下駄をのぞかせた。鼻緒は美しかったが、よく見ると歯のちびた下駄だった。

「歩きやすいんだから。鼻緒をすげ替えてもう十五年も履いてるんだ」

佳代子は、周囲のテーブルに母の声が届いてしまうことを恐れた。そういう心持ちになったのは初めてのことだった。

「そうだお母さん。帰りに新しい履き物を買いましたよ。銀座だったら質のいいものをたくさん置いているはずだから」

母はとんでもないと首を振り、「新しいのを買ったって、生きているうちに履ききれないもの」と、そう言った。なんの感傷もない、あまりに自然な物言いだ。だから無駄になっちゃうよ、と母は言ったのだ。

佳代子はこのよう高級レストランに出入りする婦人たちを、常々疎ましく思っていた。つましい暮らしこそが理想だった。けれど今日はやはり彼女たちの華美な装いや振る舞いが羨ましかった。こんな風に奔放で浪費家の母だったら、どれほど気が楽だったろう、と。

(中略)

「佳代ちゃん、悪いけど、今日のご飯を多めに炊いてくれないかい」

母が言ったのは、上野見物に行く日の朝だ。佳代子はその通りにし、母の朝食を食卓に並べ、仕事に向かう夫を送り出した。母が使っている部屋に入ると既に布団は上げてあり、塵ひとつなく隅々まで掃き清められていた。変わらぬ母の証があった。けれど母が母なのは、故郷とこの家の中だけなのだ。

母はこの日、見慣れぬ風呂敷包みを持って表に出た。

「私が持ちましょう」

玄関口で佳代子が手を伸ばすと、慌てて風呂敷をかき寄せ胸に抱いた。その拍子に母の爪が触れ、佳代子の手の甲にひっかき傷を作った。上野まで歩く途中、その傷はみみず腫れはになった。

母は昔、佳代子を叱るとき決まって平手で腿ももをぶった。華奢きゃしゃなくせに力が強く、その跡はいつもみみず腫れになった。佳代子は夜寝るときや学校の帰り道、たびたびそこを触ってみた。不思議と悲しい気持ちにはならなかった。むしろ、なだらかに盛り上がった丘陵③は、指ゆびに心地よいものだった。母の、てのひらの跡。自分の身体に刻まれた、母の強さだった。

不忍池しのばすのいけを歩きながら「大きな蓮はすだねえ」とはしゃぐ母が、軽く足を引きずっているのに佳代子は気付く。

「足、お辛いつらいんじゃないの？」

母は急いで素知らぬ顔を作った。

なぜ甘えてくれないのだろう。佳代子は、得体の知れない苛いらだ立ちに覆われた。車だつて喫茶店で休むのだからもしないことなのに。ただ、お母さんに喜んで欲しいだけなのに。

「やっぱり下駄を買いましたよ。車で行けばいいわ。お昼は精養軒を予約してあるからそのあとで」

^④努めて明るく言う^④と、母は A 今朝の風呂敷を佳代子の顔の前に差し出し、得意顔で包みを解いた。そこには塩むすびが四つと、いつの間にか買ったのか、注4 日水のソーセージが二本入っていた。

「お母さんのために、そんなにお金を使うことはないよ、佳代ちゃん。食べるものなんてなんでもいいんだから」

佳代子は、母の手のひらを見つめたまま、B 立ちつくした。

そのとき、ちょうど後ろを通りかかった若い二人連れが、道をふさいでいた母の背にぶつかった。その拍子にソーセージがぼろりと風呂敷の中から転げ落ちた。

佳代子の中なかでなにかが爆はぜた。

「道の真ん中で立ち止まっちゃ迷惑めいわくじゃない！」

あまりの剣幕けんまくに、母より若者たちのほうが驚いてこちらを見た。

「そんなちびた下駄を履はいてちやダメじゃない！こんなところでおにぎりなんか、みつともないんだわ」

佳代子は大声で泣き出したかった。どうして泣きたいのか、怒りなのか哀しみなのか、なにもわからなかった。わからなくなって佳

代子は駄々をこねたのだ。

こうして痲癩を起すと、母は必ず佳代子を叱ったものだった。凄まじい厳しさで。[C] 美しい仕草で。けれど目の前の母は所在なげに風呂敷を丸めて、小さくうつむいている。「ごめんよ。悪いことしたね」と心細げに詫びている。

「お母さん、田舎者で……佳代ちゃんに恥ずかしい思いをさせちゃって」

「どうして周りが見えないの？ どうしてお金のことばかり言うの？ どうしてちゃんとできないの？」

母を責める言葉が、止まらなかつた。この残酷な気持ちはどこから来るのだろう。なにが許せないのだろう。きっと母でも、東京でもない。もっと大きな、自分がいつしか背負ってしまった現実が恨めしいのだ。それを受け入れたくなくてぐずっているのだ。

母は目に、うつすら涙を浮かべて立ちすくんでいた。それから小声で「お母さん、もう佳代ちゃんの家に戻りたいよお」と言った。道の真ん中で、^⑤幼女がふたり、^⑥泣いていた。

その夜、佳代子は慎重に母に詫びた。

母はけれど、なにもなかつたかのように優しく居て、その後数日を過ごした。佳代子は母の上京を台無しにしてしまったことを悔いた。この後悔から一生逃れられないだろうと思つた。もう、それを取り戻す機会は残されていない予感があつた。

母が帰る日、夫と一緒に上野駅まで送つた。母は夫に何度も頭を下げた。「お世話になりました。安心しました。佳代子をよろしくお願ひします」。それから佳代子に向かつて、「お陰様でほんとに楽しかつたよ。いい思い出ができたよ」と何度も何度も礼を言つた。

汽車が滑り出すと、母は開けた窓からちよこんと顔を出し、遠ざかりながらやはり何度も頭を下げた。白いほつれ髪が [D] 風にもてあそばれていた。

母がすっかり見えなくなつてから、佳代子は手の甲に触れてみた。^⑥みみず腫れはもうすっかり引いていて、桃色のかき傷だけがうつすらと残つていた。

(木内昇『てのひら』より)

(注1) 雷蔵 … 当時人気を博した映画俳優。

(注2) 和光や松坂屋 … ともに高級百貨店の名前。

(注3) 資生堂パーラー … 高級洋食レストランの名前。

(注4) 日水 … 水産・食品の会社である日本水産株式会社のブランド名。

問一 文中の空欄

A

D

 を補うのに最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、

同じ記号を繰り返し用いてはならない。

ア・りんと イ・はるかに ウ・ほんやりと エ・ほのかに オ・ふらふらと カ・やにわに

問二 傍線部①「母の髪は薄く、つむじの辺りは大きく地肌が見えていた」とあるが、このときの「佳代子」の心情として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・普段から老いに対して何とか周囲に失礼のないように取り繕う母の気配りに初めて気づいて、母の陰ながらの努力に感動している。

イ・自分にも他人にも厳しかった母の食事中の失態に、母自身が驚いてうなだれている様子を、かわいそうに感じて同情している。

ウ・子どもには分からなかった母の苦労に気づき、今回の東京観光を楽しんでもらい、少しでも親孝行したいと決意している。

エ・母から、子どもの頃に感じていた母親としての力強さが失われ、老いともなう母の衰えを目の当たりにして戸惑いを感じている。

オ・突然の出来事に何が起きたのか理解できず、ぼうぜん 呆然としていた自分に対して、母を氣遣ってその場を取りなした夫の機転に感謝している。

問三 傍線部②「周囲のテーブルに母の声が届いてしまうことを恐れた」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・食事をする場であるにもかかわらず、下駄を見せる不衛生な振る舞いをお店の人に気づかれないようにしたかったから。
イ・出費を惜しんで年老いた母に古い下駄で無理に歩かせるような非人情な娘と、周囲の人間に誤解されることを恐れたから。
ウ・子どものような母の無邪気な様子を微笑ましく思う反面、大きな声なので周りに迷惑をかけるのではないかと心配したから。
エ・千駄木まで歩こうと言いつつ母の世間知らずな言葉から、自分まで東京を知らない田舎者だと思われなくなかったから。
オ・つつましく生きようとする母の言動が、華やかな東京のレストランにそぐわず、みつともないと思ひ恥ずかしかったから。

問四

傍線部③「指に心地よいものだった」とあるが、このときの佳代子の心情として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・娘の過ちを正す母の信念の強さと娘に対する思いの深さを実感し、自分がその母の娘であることを誇りに思っている。
イ・決して大げげにならないように手加減してくれる母の愛情を実感し、厳しい中にある優しさをありがたく思っている。

ウ・母が自分に失望していると実感するものの、自分は母を嫌になることができずこれからも好きでいたいと思っている。

エ・愛する娘であっても厳しく育てようとする母の強い思いを実感し、将来その思いに応えないといけないと思っている。

オ・いつもは上品で優しい母が叱るときだけは厳しく接することもあると実感し、いつか自分もそうなりたいと思っている。

問五

傍線部④「努めて明るく言う」とあるが、このときの「佳代子」の心情として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・周囲の迷惑を考えないで自分勝手な振る舞いをする母に憤りながら、大人になった自分が取り乱すわけにいかないと自制する気持ち。
イ・母に対してもてなしと心配りをないがしろにされて苛立つ気持ちを抑えながら、母との東京観光の雰囲気を楽しいままにしておきたい気持ち。

ウ・母が自分たちの経済的苦しさを見透かし親切にしてくれることを理解しながら、母が自分に甘えることができないことに対して申し訳なく思う気持ち。

エ・東京の事情に詳しくないにもかかわらずその場を取り仕切ろうとする母に不快感を抱きながら、娘の言うことを聞かない頑固さにあきらめる気持ち。

オ・自らの老いに無頓着でいつまでも若いつもりでいる母にうんざりしながら、娘である自分が少しでも守ってあげなければと決意を新たにする気持ち。

問六 傍線部⑤「幼女がふたり、哭いていた」とあるが、これは「母」と「佳代子」二人のどのような状態を描写しているか。二人の心情を明らかにした上で六十字以内で説明せよ。

問七 傍線部⑥「みみず腫れはもうすっかり引いていて、桃色のかき傷だけがうっすら残っていた。」とあるが、このときの「佳代子」の心情として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・表向きは今回の訪問を楽しんだと言っていたが、実際は深く傷つき二度と東京には来たくないと母に思わせたことを残念に思っている。

イ・手の甲の傷の痛みに耐え母の前では何事もないように振る舞っていたため、この傷のことで母に要らぬ心配をさせずにすんで安心している。

ウ・昔のような力強く厳しい母の姿は過去のものとなり、年老いて弱々しくなった母の姿に過ぎ去った時の流れを感じさみしく思っている。

エ・不慣れな東京観光で思うようにもてなすことができなかったが、それでも楽しんでくれた母に感謝し、その娘であることを誇りに感じている。

オ・母との断絶を予感させるような激しいケンカをしてしまったが、実の親子なので時間が経てば誤解が解けて仲直りできることを信じている。

問題は次のページに続きます。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお出題の関係上本文を一部改めた部分がある。

吉野の山を追われた源義経（九郎判官殿）は、奈良の都の勸修坊という小寺に身を寄せていた。その奈良の都で、但馬阿闍梨や美作ら七人の僧兵が、悪事をはたらく相談をしている。

但馬阿闍梨申しけるは、「日頃はありとも覚えぬ冠者の、極めて色白く、背小さきが、よき腹巻着て、黄金作りの太刀の、心も及ばぬを脇に挟み、勸修坊の門外に、夜々たたずむぞ。己が太刀やらん、主の太刀やらん、過分したる太刀なり。いざ寄りて奪らん」とぞ申しける。

美作と申す法師、「あはれせんなきことをのたまふものかな。この程は九郎判官殿の、吉野の執行に攻められて、勸修坊を頼みておはするに、もしその人にておはしませば、衆徒の為にゆゆしき大事かな」と申しければ、但馬、「それは御辺の」の致すところぞ。などか奪らざらん」と言へば、「それはさる事にて、便宜悪しくはいがあるべからん」と申しければ、「さればこそ毛を吹いて疵を求むるにてあれ。人の横紙破るになれば、さこそあれ」とて、勸修坊の辺を狙ふ。

「各々六人は、築地の陰のほの暗き所に立ちて待て。太刀の尻鞘に腹巻の草摺を投げかけて、『ここなる男の人を打つぞや』と言はば、各々声に付きて走り出で、『いかなる痴者ぞ。仏法興隆の所に、度々衆罪を作るこそ心得ね。命な殺しそ。侍ならば髻を切つて、寺中を追へ。凡下ならば耳鼻を削りて追ひ出せ』とて、奪らぬは不覚人共」とぞ進みける。

判官はいつもの事なれば、心澄まして笛を吹き給ひておはしけるところに、興がる風情にて通らんとする者あり。判官の太刀の尻鞘に腹巻の草摺をからりと当てて、
II
と言ひければ、この法師共、三方より追つかけたり。

（『義経記』による）

- (注1) 冠者 … 成人の男性。
- (注2) 執行 … 山にこもり修行をする修験者の役職。
- (注3) 衆徒 … 僧侶・僧兵たち。
- (注4) 御辺 … あなた。
- (注5) 毛を吹いて疵を求むる … ありもしないような欠点をでっちあげて指摘すること。
- (注6) 草摺 … 腰のあたりに付ける防具の一種。
- (注7) 衆罪 … 多くの罪。
- (注8) 髻 … まげ。
- (注9) 仏法興隆の所 … 仏教が盛んである場所。ここでは奈良のこと。
- (注10) 凡下 … 庶民。
- (注11) 不覚人共 … ここでは臆病者だ、浅はかな者だという意味。

問一 二重傍線部 a～c の主語は誰か。最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし同じ記号を繰り返して用いてもよい。

- ア・冠者 イ・但馬阿闍梨 ウ・美作 エ・法師共 オ・作者

問二 傍線部 A「せんなきこと」・B「などか奪らざらん」の解釈として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- ア・無益なこと
- イ・理解できないこと
- ウ・意気地のないこと
- エ・おもしろくないこと
- オ・全く関係のないこと

B 「なか奪らざらん」
ア・持ち物全て奪い取ってしまおうか
イ・なぜ奪い取ってしまうのだろうか
ウ・どういう方法で奪い取ってやろうか
エ・どの太刀を奪い取ればよいだろうか
オ・どうして奪い取らないことがあるか

問三

I に入る内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・強欲　イ・邪推　ウ・臆病おくびょう　エ・便宜　オ・早合点

問四

傍線部①「人の横紙破る」とあるが、その内容を説明したものととして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・黄金の太刀を手に入れるためにはたとえ自分が傷ついたとしても実行するということ。

イ・黄金の太刀の持ち主に計画を邪魔されたとしても何とかして達成してやるということ。

ウ・通りすがりの人に無理難題を押しつけて黄金の太刀をだまし取ってやろうということ。

エ・勧修坊付近によく現れる者が持っている黄金の太刀を無理矢理に奪い取ってやること。

オ・仲間が自分を止めたとしても忠告を無視し黄金の太刀を強奪するつもりだということ。

問五

傍線部②「命な殺しそ」とあるが、ここからうかがえる但馬阿闍梨の意図はどのようなものか六十字以内で答えよ。

問六

II に入る内容として最も適当なものを本文中から十五字以内で抜き出して書け。

問七

本文の内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・近ごろ夜になると背の低い男性が勧修坊の近くで笛を吹くようになっていた。

イ・義経は僧兵たちが黄金の太刀を奪いに来ると予想して待ち受けていた。

ウ・黄金の太刀の持ち主は不用意な発言によって僧兵たちに狙ねらわれることとなった。

エ・僧兵の襲撃に気づき、義経は主人の黄金の太刀が奪われないように逃げ出した。

オ・僧兵たちは襲撃する相手はたいしたことのないやつだと決めつけあなどっていた。